

「しろばんば」試論

序

井上靖の自伝的小説「しろばんば」は、昭和三五年一月から昭和三六年九月にかけて雑誌『主婦の友』に連載され、後、昭和三七年一〇月中央公論社より刊行された。この作品には、昭和三六年一〇月から昭和三七年一二月にかけて同じ『主婦の友』に書き継がれた続篇があつて、これは、『統しろばんば』として昭和三八年一月中央公論社より刊行されている。今日では、正、続篇を合せて『しろばんば』前篇として、各種の文庫本等に収録されている。然し、正篇と続篇との間には、主人公の年齢で二歳の空白があり、厳密には、二つの作品と考えられる。本稿では、一先ず、正篇のみを考察の対象としたい。続篇は、また、別のモチーフによつて書かれたと判断されるからである。

年譜によると、昭和三五年井上は五三歳、前年五月には父隼雄の死に出会つてもいるから、人生の半を過ぎた井上が、その半生を回顧し、総括しようとする心境に立ち到つたものと考えられる。この作品の執筆事情について、井上自身は、次のように語っている。

越 智 良 二

(国文学研究室)

…この作品に登場して来る人物は、おぬい婆さんも、さき子も、上の家の祖父も、祖母も、伯父の石守森之進も、みんな実在の人物です。この作品に書かれてある事件も、作者の身边に起つた實際にあつたことです。(中略)私は幼少時代の自分に洪作という名前をつけて、小説の中で、もう一度幼少時代の生活を繰り返して貰つてみたようなものであります。(新潮社版『井上靖小説全集』25「自作解題」)

同じ井上の随筆集『幼き日のこと』(昭和四八・六、毎日新聞社刊)等に照合してみると、「しろばんば」に描かれた内容は、ほど井上自身の幼年時を其儼なぞつたものであることが確認されるが、若干の虚構部分も無いではない。然し、その多くは、井上の所謂「一枚の絵」(記憶の断片)を具象化する過程で付加されたリテールであつて、基本的には、井上の語る通りである。こうした点では、同じ井上の小説『あすなる物語』(昭和二九・四、新潮社刊)が多量の虚構部分を含んでいるのと対

諷的である。このように井上が自己自身の人生を回顧し、自己に關つた死者達を描くという作業は、必然的に、死者達への鎮魂といった趣を帯びてくるであろう。「しろばんば」という題名も、それは、其俚白髮の老婆即ちおぬい婆さんを象徴したものであろうが、同時に、夕闇の中に漂い出てくる微生物を通して、蘇ってきた死者達の魂魄を連想させもする。本稿では、主人公伊上洪作の性格に注目し、その個我覚醒の過程を検証しつつ、作品の主題を分析したいと考える。

(一)

「しろばんば」の中には、明らかに大人の視点によって書かれた部分と、子供の視点が其復活がされている部分がある。例えば、第一章で洪作を取り巻く人間関係を説明する部分は、前者であろう。その説明を要約すれば、ほど次のようなものとなる。主人公伊上洪作は、軍医である父捷作（モデルは隼雄）と母七重（やゑ）の間に生れた長男である。然し、彼は、豊橋に住む両親とは同居せず、母の郷里である伊豆半島の山村湯ヶ島に、おぬい婆さん（おかのお婆さん）と二人で暮している。おぬい婆さんは、洪作の母方の曾祖父伊上辰之助（井上潔）の妾であった女性である。辰之助は、自分の死後、この妾の生活を安定したものとする為に、孫娘の七重即ち洪作の母を分家させ、ぬいを其の養母として伊上家の戸籍に組み入れたのである。従つて、洪作にとっては、義祖母ともいべき存在であるが、血縁的繋がりはない。伊上家の人々にとつては、おぬい婆さんは、無法な侵入者であり、憎むべき敵対者である。洪作は、母七重が妹出産の折に、一時的におぬい婆さんに預けられたのだが、おぬい婆さんは、洪作を手懐け、手許に引付けて、自らの地位をより安定したものにす手段としたのである。そして、おぬい婆さんと洪作の生活する土蔵の近くには、母の実家である上の家即ち伊上本家があ

り、其処には、洪作の曾祖母しな（ひろ）、祖父文太（文次）、祖母たね（たつ）、それから多くの叔父叔母たちが住んでいることになっている。以上が洪作を取り巻く人間関係のあらましであるが、それは次のように書かれている。

おぬい婆さんは曾祖父辰之助の妾であった。（中略）おぬい婆さんと本家の上の家とは、全く仇敵の關係にあつた。曾祖母のおしな婆さんにしてみれば、おぬい婆さんは自分から夫を奪つた不倶戴天の仇敵であつたし、祖父母たちから言わせれば、曾祖父辰之助に取り入つてついに本家よりも大きい家屋敷を手に入れ、しかも自分たちの娘を養女としてその義母になりすまし、いまは孫の洪作まで人質に取り上げてしまつている腹黒い女であつたのである。

これは、大人の眼によって整理され、叙述されたものであろう。

然し、「しろばんば」の中では、こうした人間關係は、一つ一つ子供である洪作の眼から眺め直されてゆく。例えば、上の家のみつ（まさ）は、戸籍上は洪作の叔母に当たるが、彼は、同年齡の「みっちゃ」を叔母と実感することは出来ない。同様に、みつの姉であるさき子（まぢ）は、戸籍上は「さき子叔母さん」である筈だが、彼には「さき子ねえちゃん」としか感じられない。祖母たねは、そうした彼の呼び方を訂正しようとするが、彼は従わない。

こうして彼は子供の実感に即して周囲を見ているのだが、そうした彼の眼にも、呼称の二重性を通して大人達の人間關係は捕えられてゆくようである。その端的な例は、おぬい婆さんの呼称であらう。

「今、おぬいおばあちゃんが――」

洪作が言いかけると、間髪を容れず、

「おばあちゃんじゃないの。おぬい婆さん」

さき子は訂正した。

「おばあちゃんだよ」

「おばあちゃんであるんですか。よその者よ。いいの、よく覚えておくのよ。あんたはあの人と一緒に暮しているけど、あれはおばあちゃんじゃないの。お家の人ではないの。何と云ったらいいかしら、さうね、——婆や」

此処には、おぬい婆さんと上の家との敵対関係が如実に現れており、洪作は、子供乍らに其れを認識している。『幼き日のこと』によると、この場面は、井上の実体験であつたらしく、次のように書かれている。(おぬい婆さんはおかのお婆さん、さき子はまちである。)

おかのお婆さん、おかのお婆さんと私が祖母を呼ぶのに対して、ある時、彼女(注、まち)は私をたしなめた。

——おかのお婆さんじゃないの。おかのさん。

——おかのお婆さんだ。

——違うの。おかのさんとお言い。あんたのおばあさんは、本家のおばあさんだけ。おかのお婆さんは、おばあさんじゃないの。あれは、おかのさん。

此処には、おかのお婆さんと井上本家との敵対関係が如実に現れているが、再び「しろばんば」の作中世界に帰つて言うと、おぬい婆さんの方も、上の家の人々を呼ぶ時には、必ず「ぐずのおみつ」とか、「ろくでなしのさき子」とかいった形容詞を付している。洪作自身も、おしな婆

さんには「悪いもんの人質」と呼ばれたり、村人には「おぬい婆さんの食いもの」と呼ばれたりしている。以上のような呼称の例を拾つてゆくと、洪作は、自己の置かれた立場について全く無自覚であつたとは思われない。彼は、唯、おぬい婆さんの甘言にたぶらかされて一緒に暮しているのではなく、おぬい婆さんの愛情の中に現実的な打算のあることを承知の上で、一緒に暮しているのである。後年、井上がこの義祖母との共同生活を「強固な同盟関係」と呼ぶのは、そうした事情に基く為であろう。そして、又、此処からは、洪作という擬孤児の持つ性格上の一特質が抽出出来るようにも思う。それは、社会的弱者に対する親愛・同情であり、幼い乍らにおぬい婆さんを庇護しようとする男性的原理である。それは、又、換言すれば、世間から白眼視された人間に対する共鳴であり、俠氣とでもいった性格の発露である。こうした洪作であればこそ、母親の七重は、情を同じくする存在とはなり難いのである。何故なら、第六章にも見られる如く、七重は、偶に帰省した実家の中でも一番の権力者であり、強者であるからである。

そして、又、こうした洪作の弱者への親愛・同情は、作品全体の基底をなすものでもある。それは、洪作がおぬい婆さんと同等の忠誠を尽くすべき存在であるさき子の場合を見ても分かる。勿論、沼津の女学校を卒業し、村の小学校の代用教員となつた頃のさき子は、同情すべき弱者ではない。然し、同僚の中川基と恋愛し、未婚のままに妊娠した後のさき子は、保守的な村の中で、敵しく批難される社会的弱者である。おぬい婆さんにしろ、さき子にしろ、世間の白眼視に耐えてひたむきに生きようとする人間に対し、洪作の俠気は、強い共鳴を促されるものゝようである。

尤も、おぬい婆さんの洪作に対する愛情の中には、一面において、曾祖父辰之助の残像を洪作の裡に見ようとする要素があつて、それ故に、

その愛情は無類の奉仕的なものでもある。一面において、現実的な打算に基くものであることは否定出来ないが、洪作は、おぬい婆さんの愛情の真实性を疑わない。又、さき子の洪作に対する愛情も、この大人達の間関係に巻き込まれ両親と離れて暮す甥に対して、母親代わりとでもいった性格を持ち、より純粋なものであったと考えられる。洪作は、その事を直覚してもいる。それ故に、彼のさき子に対する同情も、より強固なものとならざるを得ない。

以上のような点に留意するにしても、尚、洪作の俠気ともいうべき特質は根強いものである。そのことの傍証として注目されるのは、彼の中川基に対する感情の推移である。洪作は、初め、この大学出の青年教師に強い好意を抱いていた。その好意は、中川がさき子の恋人となった後も、持続していた。然し、その中川への好意は、次のような場面から微妙な変化をみせ始める。即ち、洪作とさき子が中川を下宿迄送っていった夜道の場面である。

「洪ちゃんも、さき子と基は怪しいぞ、って唄ってるの？」

さき子は笑いながら訊いた。

「ううん。唄ったりしないや」

洪作は答えた。するとさき子は、

「ほんとに怪しいんですもの、怪しいって言われたって仕方がないわ。ねえ、洪ちゃ。それを中川先生だったら、男のくせにびくびくしているの。おかしいわね。洪ちゃだったら、平気よ、ね」

さき子が言った。洪作に対してはいたが、明らかにそれは傍の中川基を意識したものであった。中川はそれに対しては何も言葉を出さないで、

「星が高いな」

そう言って夜空を見上げるようにした。

此処には、恋にひたむきなさき子のそれに比し、明らかに消極的で保身的な中川の態度が認められる。それは、極言すれば、男の卑小さといったものであり、洪作は、それを直感しているのである。この後、さき子は妊娠し、中川は、半島の西海岸にある小学校へ転任していくことになる。中川が生徒達の前に転任の挨拶をする場面で、洪作は、中川がさき子の為に犠牲者となって遠くへ去っていくのだと思ひ込む。そして、男らしい中川に限りない同情を寄せるが、その直後に、おぬい婆さんから、さき子と中川が結婚するのだと聞かされ、自分の寄せていた同情が急に馬鹿らしくなってしまう。此処には、中川にさき子を奪い去られるのではといった不安もあるのだが、根本的には、俠者中川の犠牲的行為（と思われたもの）に感動し、やがて失望するという洪作の俠気が、強く作動しているのである。中川は、この後、洪作の心の中からも、物語の中からも急速に消えてゆく。一方、さき子は、上の家に停ま^{とど}って男子を出産し、不治の病に陥ってゆく。このさき子に対する同情が、作品全体に通底する主題であると思われるのだが、その点については後述する。此処では、洪作の持つ俠気といった特質を、確認しておきたい。そうした特質の故に、洪作は、弱者への親愛・同情を示すのであり、それが、この作品の基本的な性格を形造っていると考えられるからである。それは、一口で言えば、人道主義的な味いである。洪作とおぬい婆さんは、血縁的な繋がりを持たないにも拘らず、弱い者同志の強い愛情によって結びつけられている。其処には、人間と人間が心情的に結合し得る可能性が示されている。さき子と洪作の場合も、単なる血縁的繋がりというよりも、それ以上のシンパシーによって結びつけられている。人間間の善意や愛情が信じられているのである。これは、後年の井上文学の一面をな

す人道主義的傾向の原型とも考えられるであろう。

(二)

「しろばんば」の作中世界は、洪作の小学二年生の春から三年生の秋に到る一年半が内容となっている。事件は、時間的進行に沿って展開し、そうした時間の軸の上に空間的拡大が組み込まれている。そうして、洪作の個我の覚醒が描かれるわけだが、そうした過程の中で先ず気付かされるのは、男子の出現とでもいった一特色である。その最もよい例は、第二章に描かれた一連の袴事件であろう。舞台は、洪作の住む土蔵と周囲の親戚から小学校へと拡大してゆく。洪作は、一学期の終業式の日、村の名家の子供として一人だけ袴を着けて登校する。そして、上級生達の虐めに合うが、洪作は、抵抗することが出来ない。処が、その日、もう一人袴を着けて登校してきた同級生の浅井光一は、同様の上級生の虐めに対し、敢然と立ち向かう。洪作は、この勇氣ある少年の姿に感動し、自らの卑屈さを痛感する。これは、非道や横暴に対して敢然と立ち向かう勇氣の問題であり、人生において闘うべき時には闘わなければならぬという男の生き方の発見である。

続いて、一学期の成績が発表され、それ迄一番であった洪作が二番となり、先の浅井光一が一番となる。洪作は、学校の成績でも暴力に立ち向かう態度でも、自分は光一に及ばないという気持になる。おぬい婆さんは、洪作が二番に落とされたことを知って、学校へ怒鳴り込もうとするが、洪作は、其の足元にしがみついて必死に止めようとする。此処にも、又、一つの勇氣の問題があると思われる。此処に示されたのは、自己の敗北を受容しようとする勇氣であり、男らしい態度である。洪作は、誠に深く敗北を受容するわけだが、此処にこそ、却って洪作の強さがよく現れており、男子としての個我の覚醒も窺われるのである。

そのことは、又、続いて起った門野原からの遁走事件にも示されている。これは、洪作が、伯父でもあり校長でもあった石守森之進（石渡林太郎）に連れられて門野原の彼の家へ一夜泊りに出掛けた際に、勇氣を出して一人で走って帰ったという事件である。此処に見られるのは、洪作の主体的意志の発動といったものである。尚、この門野原遁走事件は虚構であって、『幼き日のこと』等によると、実際には、井上は伯父の家に一泊し、行水なども使っているようである。井上が此処に此の虚構を挿入したのは、洪作の内なる男子の出現を描こうとした為であろう。こうして洪作は、おぬい婆さんの庇護下にあり乍らも、徐々に個我の覚醒に向かうのである。

門野原遁走事件は、一面において、彼の生活空間の拡大といった意味合いを持つが、この後、彼は、夏期休暇に入って、豊橋に住む両親の所へ向かう。これは、彼の人生にとって、決定的な空間的拡大である。そして、それは、彼に種々の認識の变革を齎らしている。例えば、湯ヶ島から眺め慣れた小さな富士と、汽車の窓から眺めた大きな富士との差に驚き、「あ！こんなところにも富士があらあ」と叫んだりするのが、その好例である。そして、又、此の空間的拡大は、洪作に対して、村と町という問題を提起することになる。即ち、村の子供である洪作は、自己とは異質な町の子供に遭遇し、劣等感を抱くことになる。例えば、それは、以下の如きものである。

先ず、第一に、馬車に乗って湯ヶ島部落を抜け出し大仁の町に到った時の思いである。

大仁へはいると、ここは洪作にとっては全くの異郷であった。湯ヶ島の新道より賑やかな通りがかなり長い間続いており、湯ヶ島の子供たちよりずっと都会風な顔を持ち、そしてもっときれいな服装をし

ている子供たちが、路傍に立っているのが見えた。

続いて、大仁から軽便鉄道に乗って沼津の町に着いた後、旅館の前を眺めた時の感想である。

時々洪作の立っている前を町の子供たちが通った。大仁の町の子供よりまた一層、みんな小ぎれいな恰好をして、下駄や草履を履いていた。(中略)街の子供たちはふだんもよそ行きのようなのを履いているのであろうかと洪作は思った。子供たちが通る度に、洪作は顔を俯向けた。何となく相手の顔や姿を見守ることがためらわれた。顔立ちも、着ている着物も、歩き方も、何もかも相手に及ばないものを感じた。町の子供たちの言葉は、はきはきして心地よい。明るい響きを以って洪作の耳に聞えた。洪作はすっかりひげめを感じて、再び宿の内部へ引っ込んでしまった。

そして、更に、沼津から汽車に乗って辿り着いた豊橋における次のような印象である。

湯ヶ島などでは見たくても見られない色の白い目鼻立ちの整った少女が、金切声を張り上げて、大きな金魚を追い廻したり、やはり同じように湯ヶ島では想像もできない神経質な顔をした少年が、眉をしかめて、一匹の小さい斑点のある金魚を追いかけてたりしているのを眺めていた。都会の子供たちは、どうしてこのように利口そうで、はきはきものを言うのだろうかと思った。

以上、三つの実例を重ねてみれば、洪作の中にどのような思いが生じて

いるかは明らかである。此処では、都会の子供達が持つ華やかな外見が、洪作に劣等感を抱かせているのである。然し、注目すべきは、洪作が実に深く自己の劣等性を認める点である。その為に、劣等感は陰湿なものとならず、却って、快い謙虚さのようにさえ見える。この点は、先に、洪作が浅井光一の勇氣に感動した場合と同様である。

では、何故洪作は此のように自己の劣等性を深く認識することが出来るのであろうか。そのことを考える場合には、先ず、この洪作という少年の置かれているやゝ特殊な位置について考える必要があるであろう。即ち、彼は、村の子供ではあるが、純粹な村の子供ではない。村の中でも特権的な位置にあり、両親は都会に住んでいる。将来の大学進学を通じて、町への道は確実に展かれている。謂わば、彼は、町と村の間項的存在である。従って、彼の劣等感も、例えば新美南吉が「いぼ」(昭和一八・九、童話集『牛をつないだ樁の木』所収)で描いたような、絶望的なものとはならないようである。

そして、又、洪作は、一見華やかな都会の子供達の中にも、或る「神経質」な虚弱さの在ることを見抜くだけの眼を持っている。例えば、彼は、豊橋へ向かう汽車の中で、富士川や天竜川が川幅ばかりは広くても水の流れる部分は狭く、却って湯ヶ島の狩野川の方が水量が豊かで立派だと考えたりする。そして、富士川で泳ぐ町の子供達を軽蔑し、狩野川で泳ぐ自分達の方が位が上だと思ったりする。こうした洪作の眼は、沼津の親戚かみきの家へ到って、町の子の典型ともいへば蘭子・れい子の姉妹に出会った時にも働いている。例えば、蘭子は、贅沢に我侷一杯に育った美しい少女であるが、洪作を「田舎の人」と呼び、理由のない意地悪さで彼をたじろがせる。洪作は、蘭子に圧倒されるが、彼女が妹のれい子と自転車に乗る順番をめぐって争った時、妹の頬をばちんと打ち乍ら却って自分の方がうわっと泣き出すのを目撃する。此処では、驕

慢さの裏に脆弱さのあることが、的確に見抜かれている。それから、又、洪作は、かみきのおばさんに都会風のご馳走の名前を並べられた時、「洪ちゃ、嫌いだ」と言い続ける誇り高さも持っている。彼は、唯都会的なものに圧倒されるだけではない強さを持っているのである。彼の潔い劣等感の裏には、このような確な眼と、誇りが裏打ちされているのである。

個我の覚醒は、自己とは異質な他者に遭遇し、其処から自己自身を再認識する過程である。洪作の場合には、自己に優越する(と見える)他者に出会い、劣等感を抱き乍らも、それを受容し、それをね返してゆくという弾力性の上に、個我が築かれていくようである。こうした点は、後の井上文学全体を考へる場合にも示唆的である。即ち、井上は、可成多くの自伝的小説や家庭小説を書いているが、所謂「私」小説の伝統からは切れている。「私」小説作家の個我が、自他未分離の農村共同体的心性基盤を持ち、安易な自己肯定と自尊観念を突出させているのに対し、井上のそれは、遙かに相対的自己認識に支えられている。時に、物語性の過剰から通俗性を帯びるにしても、井上の文学は、社会的広さを失わない。(論者には、別に、優れた「私」小説が持つ深さに対する愛好があり、劣等感的優越感を極点に迄推しつめたような葛西善蔵等の純文学を評価するものだが、それは、此処での問題ではない。再び、井上の文学に還って言えば、)この「しろばんば」にしても、即自的な自己陶酔的回想文学ではなく、客観的な普遍性を持つ少年文学となり得ている所以であろう。

(三)

先に、洪作の中には俠気ともいふべき性格があつて、それが、弱者への親愛・同情を齎すものであることを述べた。弱者とは、具体的には、

「しろばんば」試論

おぬい婆さんであり、さき子であつた。両者は、共に、洪作が同等の忠誠を尽くすべき存在であるが、「しろばんば」正篇の中で、より重要なのはさき子である。「しろばんば」正篇の最終章で、さき子は死者となるわけだが、死者とは、最も完璧な弱者であろう。それから、又、洪作が異質な他者と遭遇し其処から個我の覚醒を遂げるといふことを述べた。洪作にとつて、最も決定的な他者とは、死者となつたさき子であろう。即ち、その親愛・同情にも拘らず、生死によつて、二人は異なつた方向に隔てられる。そして、洪作は、さき子という死者に直面して、初めて己の人生を生きようとする自覚的人間となるのである。其処にこそ「しろばんば」の主題はあるのだが、此処では結論を急がず、さき子についてもう一つだけ確認しておかなければならないことがある。それは、異性という他者の発見である。

さき子は、洪作にとつて親愛・同情すべき弱者であつたが、一面において、思慕すべき対象でもあつた。恐らく、それは、人生において最初に出会つた異性であると言つてよいであろう。初め、さき子は、三つ編みの髪を靡かせ乍ら、沼津の女学校を卒業した都会風の少女として現れてくる。第二章の冒頭近くには、洪作が、さき子と村の共同湯に出掛け

さき子の白い豊満な裸体が湯しぶきの間から眩しく見えた。

と感ずる場面がある。此処では、臍氣乍ら女性の美しさが発見されているのである。この後、さき子は、前述の如き事情で中川基と恋愛関係に陥る。洪作は、中川と一緒に居る時の妙に甲斐／＼しいさき子の姿に気付かされる。夏休みあけになると、洪作は、さき子の中に「女」を発見し「おしろい臭いから嫌いだ」といつた反応を示すことになる。そして、さき子の妊娠後、洪作は、さき子の為に家人の目を盗んで辣菲を運ぶ役

目を引受けることになる。そうしてさき子は、男子を出産する。以上のように、洪作は、さき子の少女から女性へ、そして母親へという過程を具さに目撃することになっている。これは、まさに、異性の発見と呼ぶに相応しいものである。

普通、男の子にとって、人生で最初に会おうべき異性は母親であろう。然し、洪作の場合、特殊な事情により母親とは離れているので、その代わりとなったのがさき子である。おぬい婆さんは、年齢の点で、そういう意味での母親代わりとはなり得ない。従って、又、洪作のさき子に対する感情の中には、母性への思慕も含まれている。さき子が赤子を抱いて現れた時、洪作は、さき子の愛情が自分から赤子へ移ってしまったことを感じるが、これは、弟妹が生れた時の長子の感情に似ている。

然し、洪作にとって、さき子は、母性であるというよりも、矢張り異性である。第二章の共同湯の場面に対応する箇所として、第六章にも、矢張り共同湯の場面がある。それは、曾祖母の死後一ヶ月程経って、さき子が赤子を祖母に預け、身軽になって洪作と共に共同湯に出掛ける場面である。洪作は、久し振りで以前のようにさき子を自分のものとした気持になる。さき子は、道々女学校の校歌を唄う。そんな彼女は、洪作の眼には、母親のように見えぬ。二人は、浴槽の湯桁に腰を掛けて、再び歌を唄う。洪作は、「さき子の躰の瘦せていることは何となく心配だったが、しかし、さき子と一緒にこうした時間を持つことは楽しかった。」これは、健康なさき子が登場する最後の場面である。

井上は、後年、このさき子のモデルとなった叔母まちについて、彼女を自分の「若い愛人」と呼び、次のように回想している。

実際にまた、その容貌からしても、立居振舞いからしても、本家の人たちの中に置いてみると、若い叔母は水際立って見えた。はき溜

めに鶴が降りたように、幼い私の眼には映ったものである。

：紫の袴をちらつかせていると思う間に、恋愛したり、子供を生んだり、結婚したり、女として為すべきことはみんなやってしまっただり、結ばさつとこの世から消えてしまった若い叔母が、私にはとりわけいさぎよくも、哀れにも思われるからであろうか。(『幼き日のこと』)

井上の異性の発見は、この「美貌であった」叔母によってなされたが、洪作の異性の発見も、さき子の美しさによって導き出された傾きがある。これは、洪作の持つ性格の一面を知る手掛りでもあるのだが、彼の内部で、美醜の判断は極めて明確である。その点は、彼の好悪の感情とは、又、独立して働き得るもののようなものである。つまり、好き嫌いによって、美醜の判断が影響されることはない。例えば、沼津の蘭子に対する場合でも、その意地悪さの故に激しく彼女を憎むが、だからといって彼女の都会風の美しさを否定することはない。このような洪作の審美眼の萌芽によって、彼は、さき子という美しき異性の発見に到っているのである。だが、この洪作が出会った人生最初の異性は、その美しさを保持した仮急速に此の世を去るのである。先に見た共同湯の場面の後、さき子は、肺病に陥り、上の家の二階の自室に引き籠ることになる。或日、洪作は、一人でさき子の部屋の前を行くが、一枚の唐紙が彼等の間を隔てるのである。

洪作は唐紙に手をかけた。そしてそれを開けようとした。が、唐紙は動かなかつた。

「だめ」

思いがけず唐紙一枚隔てた向うでさき子の声が聞えた。今までの叱

賣口調ではなく、何か遊戯でもしている時の、こちらの心をじらすようなあの低く息を詰めた甘い声であった。

「開けて！」

「だめ」

「開けて、開けて！」

「だめよ」

次の瞬間ぱつと細目に唐紙が開いたと思うと、さき子の白い腕が一本飛び出して来て、洪作の頭をぼんと軽く叩くと、直ぐまた引っ返んで、唐紙は再び閉められてしまった。(中略) 洪作はさき子と会うことはあきらめて、階下へ降りると、縁側から戸外へ出た。そして自分の頭を叩くために唐紙の間から突き出されたさき子の白く細い腕を眼に浮かべていた。

こうしてさき子は、洪作の慰めるべき弱者となり、彼の親愛・同情は増幅されてゆく。この後、洪作は、さき子の病気をめぐって、おぬい婆さんと口論する。洪作への伝染を恐れ、病気の恐ろしさを説くおぬい婆さんの言葉は、其假さき子の死を予言する言葉として、洪作には響いたからである。珍らしく口もきかずに寢床に這入った洪作の所へ、おぬい婆さんがやって来る。

「もう寝たんかや」

おぬい婆さんは体を屈めると、洪作の寝息を窺うように、自分の顔を洪作の顔のところへ近づけて来た。

「うるさいな、婆ちゃ」

洪作は眼を開けると、掛蒲団の上に置かれてあったおぬい婆さんの腕を払った。すると、おぬい婆さんの腕は、なんの重量感もない。

全く手応えのない頼りなげで横に飛んだ。洪作ははつとした。(中略) 洪作はおぬい婆さんの方が、昼間見たさき子の腕より、もっと細く頼りないのを知った。さき子の腕の方は幾ら細くても白く美しかったが、おぬい婆さんのそれは骨と皮ばかりで、枯れた竹切れか何かのように取得というものがない感じだった。そんなおぬい婆さんに洪作は哀れさを覚えた。

此処では、さき子の腕とおぬい婆さんの腕とが重ね合わされ、洪作の心の中で、二人の弱者の像が結合されている。美しき異性であり母性でさえあったさき子も、それから「たった一人の庇護者」であったおぬい婆さんも、こうして洪作の親愛・同情の対象たる弱者としての実相を顕在化してくるのである。この後、洪作は、寢床の中からおぬい婆さんにお菓子をおねだり、おぬい婆さんは、再び庇護者の外見を取り戻す。然し、此処では、もう相手を勞り思い遣っているのは洪作の方であって、二人の比重関係は、微妙な変化を示し始めているのである。洪作は、おぬい婆さんの中に老いを感じ、哀れさを感じる。そして、このおぬい婆さんへの思いは、「しろばんば」統篇の中で精細に描かれることになる。

それはさておき、「しろばんば」正篇は、この後さき子の死に向って急展開し、作品中最も哀切な場面を迎えるに到る。それは、さき子が、短い余生を夫や子供と共に過ごそうと思ひ、月光の降る深夜に人目を避けて、上の家から夫の任地先へ旅立って行く場面である。さき子は、見送る洪作に、しつかり勉強して大学へ進むようにと言ひ遣して去って行く。洪作は、

……ふいに説明しがたい悲哀の思いがどこからともなく、水のように押し寄せて来た。大きな声を張り上げて泣きたいような衝動が洪作

の全身をつらぬいた。しかし、この場合も、洪作はそうした思いに耐えた。強い心で、それに打ち克つことができた。そして洪作は、今夜の自分は泣きはしなかったが、本当は生れてから今までじゅうで、今夜が一番悲しかったのだと思った。

一カ月余の後、さき子は夫の任地先で死亡し、その訃報は、突然洪作の耳にも飛び込んでくる。この箇所は、「しろばんば」の中でも最も大きな虚構部分である。というのも、実際にさき子のモデル叔母まちが夫の任地先で死亡したのは、井上本家を発つてから二年後（大正八年二月三日没）だからである。井上は、先の月明の別れの後にさき子の死を直結させ、洪作の悲しみを劇的に強調しようとしたのであろう。さき子の訃報に接した洪作は、急に机に向って勉強し始める。先のさき子の言葉に従おうとしたのである。さき子の葬式の日、洪作は、村の子供達と天城峠のトンネルへ出掛ける。休みなく坂道を登り、子供達は、「なむまいだ」と唱和する。それは、其偲さき子への葬送行進曲である。汗にまみれ、男らしく前進することで、洪作は、さき子への鎮魂の思いを果そうとするかの如くである。人間は、愛し、愛された者の死に直面する時、初めて人生の何たるかを知りかねない。兎角憂きことばかりの多い人の世を。洪作は、さき子という掛替えない他者の死を内部化する時、真の生者となるのであろうか。

註1、この両者の区分は、勿論、厳密なものではなく、従って、又、主人公が、時に、年齢以上に大人びて見える部分もある。井上は『しろばんば』を終

えて」『主婦の友』昭和三七・一二二の中で、「なるべく大人の解釈はほどこさないで幼少時代の私の心がそれをどのように受けとり、どのように反応したかを書いてあります。」と記している。

註2、モデルである井上家の家系については、藤沢全「しろばんば」『国文学』昭和五〇・三二等に詳しい戸籍調査がある。

註3、引用本文は、『井上靖自伝的小説集』（昭和六〇・三、学習研究社刊）所収のものを用いた。

註4、井上の私小説については、磯貝英夫「井上靖と私小説」『国文学』昭和五〇・三二に多くの卓見がある。

（六一年十月十一日 受理）